

ニュージーランドで考えたこと

南 雲 秀次郎*

今回の合同シンポジウムは国際会議の経験の乏しい筆者にとっては大変緊張し疲労の続いた体験でした。帰国後数週間たびたび夢でうなされた事からみてもその印象は極めて強烈なものでした。しかしこの体験は自分にとって予期したより遙かに大きな実りをもたらしてくれたものと思っています。それは次の三点に纏めることが出来ます。①ラジアータ松の極めて集約な林業を見たこと。その集約な林業を支えている総合的な林業技術と林業研究の実際を知ることが出来たこと。②従来から自分の中にあった林業という概念を広げることができ、林業研究の発展方向について新しい判断規準を得たこと。③研究の国際化と今後の対処の仕方について一応の考え方を持つことが出来たこと。以上について若干のコメントをしてみたい。

ニュージーランドと日本の林業を比較してその特徴をひとことと言えば、わが国が伝統的な方式に基づく林業経営であるのに対して、彼の国では科学技術に基づいた林業経営である点である。そこではかってわが国の林野庁が林力増強計画で描いた林業経営が現実に順調に行われていると言って良い。この事を可能にした最大の原因は、この国では林木の生育が極めて良いということである。その中でも林業上最も望ましい特質をもつラジアータ松を素材として最新の林業技術を意識的に適用して集約な総合的な林業経営システムを完成したのがニュージーランドの新しい林業である。現在でも林業試験場では個々の研究がこのシステムをより有効なものにする目的で進められており、その事が逆に個々の研究を方向づけ、研究の発展を可能にしているのではないかと感じた。これらの研究方向は決して特殊なものではなく、我々が現在研究している森林経営モデルや森林成長モデルがそのままニュージーランドでも適用できる。このような意味でも今回の合同シンポジウムは意義深いものであった。

このシステムは林業経営上大きな強みをもつ反面、林業生産一筋の緊密な総合システムであるが故に大きな弱点をもっている。それは計画どおりに生産されたものが即時にすべて需要されなければならないということである。ここでは生産されたかなりの部分が輸出されることになっている。そこには多くの競争相手が存在している。もし輸出することができない場合には、このシステムの発展どころか、それは直ちにシステムの破壊につながるのではないかと筆者は考えている。

今回のシンポジウムでは自分の語学力の不足をつくづく思い知らされた。会議を成功させるには相互の積極的な討論が必要である。約二十年前日本国内で研究者が集合したのと同じ感じで、

*東京大学農学部

多くの研究者は現在外国へ出て行くようになっている。今後若い研究者はこの道で生きて行くためには是非とも相手の話が聞け、自分の考えを述べるだけの語学力を身につけなければならないと筆者は考える。